

繁次郎話考

——青森県を中心に——

花部 英雄

一

繁次郎話とは、通称「江差の繁次郎」と呼ばれる主人公が繰り広げる一連の笑話である。いわゆるおどけ者の話で、北海道の西海岸、道南から青森、秋田、岩手県の沿岸部に伝承されている話である。このうち北海道を除けば、本州内で九〇余の話型が確認される。伝承者は漁業関係者に多く、しかもある時期北海道への出稼ぎ者によく知られている。出稼ぎ者とは、戦前まで続いた北海道の鯨漁場への季節労働者のことである。この鯨漁場（ふつう鯨場と呼ぶ）で聞いた話を現在も伝承しているのである。鯨場に各地から（と言っても東北が殆んどである）出稼ぎ者が集まるようになるのは、十九世紀以後のことである。だから江差の繁次郎話は、少なくともそれ以前に遡ることはありえない。幕末頃からの話と考えてよいであろう。

このように繁次郎話は、日本のおどけ者の話の中で本州の最北端に位置し、それも漁業関係者の間で広く伝承されていることは特異である。そこでここでは、青森県に伝承されている話を中心にし、繁次郎話の伝播、成立を考えていきたい。

二

現在青森県内に伝承されている繁次郎話を鯨場との関わりから考えていった場合、その成立について二つにまとめることができる。一つは、鯨場から話をそのまま持ち込んだ、すなわち移入過程である。もう一つは、その持ち込まれた話に、周辺の話が吸収されていく集合過程である。それぞれについていくらか説明を加えてみたい。

まず集合過程ということであるが、これは繁次郎話に限らず、ある話が勢力を持った時、それに付随して周辺のさまざまな話が吸収され増幅していくことは、伝承説話の自然な発達と言える。繁次郎話のように世間話的な要素の濃い話は、その時々伝承者の興味と関心を強く反映するものである。鯨場での収入が生活の中で大きな位置を占めていた人々にとって、繁次郎話は単に鯨場の土産話としてだけでなく、自分達の笑い話をも積極的に繁次郎に結びつけていいであろう。例を一つだけあげる。

ある親方がな、その小作人、あげ（小作料）をもって行ったでしよう。そしたば、そのもつてた人さ、親方が、

「年なんぼだ」

って聞いたけどよ。

「二十九だ」

っていったわけ。その若勢がよお、

「二十九も三十のうちだわな」

って、そう親分ゆって、ばがににしたけど、

こんだ、その米を計らったとき、三十ねかったことで、升で一つ、二つよ、二十九で。むかしなば、三十升で一俵だったからな。

「なんだ、三十ねえべ、若勢」

って、いったとよお。したら、

「親方、二十九も三十のうちだってけも、三十だべ」

ってったけど。一升ごまかされたけど。

『あまんじゃく』5号「秋田の笑い話と早物語」

この話は、秋田県雄勝郡の話であるが、これと同型の話が（「まあ三十だな」——『秋田の民話』）、男鹿半島に伝承されている。ここでは「若勢」が繁次郎となり、「升」が酒樽と変化して、海辺を舞台に話は構成されている。このように先行する村の笑話が、著名な繁次郎の名を冠せられ、繁次郎話に集合されていったであろう。もちろんこの逆の過程も成り立つであろう。

次に移入過程についてである。これは鯨場か持ち運ばれる話であるが、この話は大きく二つの要素に分類できる。第一は、鯨場を舞台にした話である。雇われてきた繁次郎が親方を相手に、鯨の漁獲、加工、その他の仕事で対立、葛藤を起こす話である。この類の話は鯨場を離れて発生しえない、その意味では「江差の繁次郎話」の本領と言ってもよい。繁次郎話の中で、鯨場を舞台にした話はその四分の一に及ぶ。

第二は、交易、出稼ぎ等によって一旦鯨場に持ち込まれた話が、繁次郎という主人公の話に組込まれた話である。このことは例をあげて説明したい。『能登志賀町の昔話・伝説集』に載っている話である。

二人連れで、道を歩いとったら○の中に矢を書いてあったと。ほいたら、丸矢という者と、矢丸という者と、すったもんだ（言い争い）しとったら、そこへある人あ通ってかって、

「お前等、何いうとるげ」

と聞いたら、

「今看板見て丸矢や、いや矢丸やというとったがや」

というたら、

「二人とも、そりやいうとる事あ、輪矢や（無茶苦茶やの意）」

というたと。

〈○のはなし〉（江下忠左衛門）

話者の江下忠左衛門は、この話を祖父より聞いている。これと同型の話が、繁次郎話の中にある。『青森県昔話記録Ⅰ・江差の繁次郎』に、青森県上北郡横浜町で採集された話として載せてある。

北海道から青森へ来たど、繁次郎。そして、旅館に南部の人泊っていだごで、今度印（○）見て、

「お客さん（南部の人のこと）、何見でる」たきや、

「俺、ここの印見でいだ」って、

「こりやヤマルだ」

「いや」

って、今度、繁次郎、お客さんに、

「これヤマルでね、マルヤだ」

ど、二人して議論になった。議論になったごで、声高くなつたべ。

今度、その下女（何事あつていだ）と思つて、二階さ上つてきた。上つてきたきや、その、

「ヤマルだ」

「マルヤだ」

ず。そして下女が来て、

「いやいや、これはマルヤでもねえし、ヤマルでもね。こりやワヤ（輪矢）だ」つて。そして、頓智比べに来たもんだも繁次郎、高の知れだ下女に負けだんだ。そしてすんなり帰つて行つたつて、江差さ。こういう話こあつたんだ。

〔輪矢〕（菊地孫太郎）

二つの話を比べてみると、能登の話は人物の形象が全くなく、専ら「輪矢」の洒落に笑いの中心がある。一方青森の話は、洒落が十分生きておらず、頓智の繁次郎が下女に破れたという点に興味が移っている。笑いの質からみて荒削りであるが、ただ繁次郎という人物に結びついたことで意味を有しているのである。こう考えてくると、能登から青森に話が流れてきたという予測が成り立つ。事実、能登の志賀町と言へば、かつての北前船の重要な寄港地でもあつた福良港があり、羽昨郡下から多くの水夫が船に乗つたところである。能登の話が北前船に乗つて北海道に渡り、鯨場を経由して青森に伝えられたものであろう。

北前船と鯨場、そして繁次郎話との関わりとして次の例がある。前掲の『江差の繁次郎』に「鯨読み」の話がある。繁次郎が鯨を数える時に、まず「ふとうふとう」と掛け声をかけて二匹数え、そのあと「一、二、三……」と続けるので、十四のところを十二匹数え

るといふ話である。これと同じような数え方が北前船の水夫の間で行なわれていた。

船乗りは受け取りはなるべく多くし、渡すときは少なく渡し、ごまかして出目（差額）をかせいだ。秋鮭の積み入れに、初めには「始まり」といつて一、二本入れ、おしまいは「おわり」といつてまた数本入るといつた方法であり、それがあとで船乗りの収入となる。

〔北前船の時代〕牧野隆信

船乗りからの聞書を書せたものであるが、一方では話として、他方では事実としてあつたのである。事実から話へと昇華したものであろうか。

このように交易往来を通じて、話が北海道に渡り、鯨場を経由して繁次郎話に接合され、それが本州に帰ってくるといった類いの話がある。移入される話として、この二つの要素をあげることができ

三

以上が本州における繁次郎話の成立を、鯨場に視座を置いてまてみたが、いくつか疑問が残る。その一つとして、核となるある話群に、それとは異質の話が容易に結びつくであろうかということである。繁次郎話で言へば、核となる鯨場での話に、農、林業及び鯨場を離れた村内での話がそう簡単に結びつくであろうか。それも百年余りの間である。次に、繁次郎自身が江差生まれなのか、それとも江差に出稼ぎに行つた繁次郎なのかといった点が不分明である。それはいづれかとしても、そのことが伝承する人の心意とど

地域別話型比較表

番号	話名	相手方	地域				番号	話名	相手方	地域			
			秋田	津軽	夏泊	南部				秋田	津軽	夏泊	南部
①	逆さ手網	親方		○	○	○	⑤①	貧乏神	金貸し	○			
②	にせ船頭	〃	○		○	○	⑤②	借金は腹腕	〃			○	
③	鯨漬し	〃			○	○	⑤③	担保なし	〃				○
④	鯨読み	〃				○	⑤④	馬が草喰ってら	馬喰	○	○		
⑤	忙しい時はどうでも	〃			○	○	⑤⑤	馬が四十一頭	〃		○		
⑥	観音休日	〃	○	○	○		⑤⑥	綿買い	商人				○
⑦	冷や飯	〃	○				⑤⑦	弁財船	〃				○
⑧	喉つけ剃刀	〃				○	⑤⑧	輪矢	女中				○
⑨	まあ三十	〃	○				⑤⑨	女郎買い	女郎				○
⑩	後日の二十払い	〃				○	⑤⑩	金の次は王手	屋根葺				○
⑪	糯米がなし	〃			○		⑤⑪	便所に鉈	親				○
⑫	マッケの木	〃				○	⑤⑫	タデー本	〃		○		
⑬	体の毒	〃			○	○	⑤⑬	姿ガレイ	〃		○		○
⑭	無用の考え	〃				○	⑤⑭	石の布団	〃		○		
⑮	木口数え	〃			○	○	⑤⑮	さっそぐだば	〃		○		
⑯	根も先もない木	役人		○			⑤⑯	米と火事	隣の人		○		
⑰	つかみ	〃	○	○			⑤⑰	餅と火事	〃		○		○
⑱	田の草取り	〃		○			⑤⑱	芋鍋と喧嘩	〃	○	○		○
⑲	にせ金	〃		○		△	⑤⑲	焼芋と火箸	〃		○		○
⑳	後戸	〃	○				⑤⑳	シコロの木	村の人				○
㉑	草覆に下駄	〃		○		△	⑤㉑	寝て背負う	〃				○
㉒	金福輪	殿様				○	⑤㉒	千頭馬	〃	○			
㉓	鴨取り	〃				○	⑤㉓	イカー杯	〃	○	○	○	○
㉔	通行料	〃			○		⑤㉔	六部の喧嘩	〃				○
㉕	茶の実	〃				○	⑤㉕	涎がこぼれる	〃	○			
㉖	嘘の皮	〃				○	⑤㉖	二十軒に九十軒	〃			○	
㉗	立小便	警官		○			⑤㉗	年が半分	〃				○
㉘	帽子に鳥	〃		○		△	⑤㉘	食うも面倒	なし				○
㉙	侍こ	侍			○		⑤㉙	空財布	〃				○
㉚	手裏似問答	和尚				○	⑤㉚	ヨゴネ治し	〃				○
話型合計									12	20	13	38	

(注) ⑤㉑の△は南部の話では殿様になっており、また⑤㉑の△は村の人になっている。

うかかわるかといった問題につながっていく。

そこで改めて資料を読みかえしてみると、微妙ながらも地域的な差異があることに気づいた。それを話型を中心にして、地域別伝承の相違をまとめてみたのが次表である。ここには、公表されている資料だけを載せてみた。管見ながら、取上げた資料を並べてみる。

『秋田の民話』(昭37)、『秋田むがし』(昭43)、『藤里の昔話』(昭52)、『西北のむがし』(昭43)、『下北地方昔話集』(昭42)、『日本の民話 東北(一)』(昭53)、『青森昔話記録—江差の繁次郎話』である。これらに載せてある繁次郎話を、秋田、津軽、夏泊(夏泊半島のこと)、東津軽郡平内町になる)、南部(下北郡、上北郡のこと)の四つの地域に分けてみた。夏泊を独立させたのは、ここがかつての津軽、南部藩の境い目で、いわば緩衝地帯と言えるような所であったからである。話の配列は、便宜上相手方によって分類してみた。それが別表である。

この表を見てもまず気がつくことは、親方を相手とする話が津軽、秋田では以外と少ないことである。親方とは鯨場の網元のこと、いわば鯨場を舞台にしている話が、津軽、秋田に少ないということである。次に、南部、夏泊の話にはない馬喰や馬(22)、田(18)の話が津軽にはある。さらにはっきりとした対照をみせているのは、対権力者に属する話である。南部ではすべて殿様(話の中では江差の殿様となっている)であるが、津軽では役人、警官となっている。

今これを南部、津軽の対立関係で整理してみると、南部の話は、江差を舞台にした親方、殿様を相手とした話を中心になっている。対して津軽の話は、役人、警官、親、隣人などを相手にした、いわば村内の話と言える。この相違は、主人公についても言えるように

ある。つまり南部の繁次郎は、江差の地での繁次郎であるのに対し、津軽の繁次郎は、名こそ江差と冠せられているが、内実は津軽の繁次郎とも呼ばれる人物造型である。これは話の受容の仕方の違いであろうか。それをまとめる前に、川合勇太郎氏の次のことは『青森県の昔話』解説が参考になる。

江差の繁次郎の話は、可成古くから話されていたようである。それが明治になっても、いろいろな話を加えて、その時代、時代を、永遠に生きつづけている。江差は北海道の江差であろうが、繁次郎の生まれはおそらく津軽の西海岸で、大きくなってから江差の漁場に、鯨をとりに行っていたところから、江差の繁次郎とよばれて、人外れの奇行を残したものであろう。

残念ながら「津軽の西海岸」生まれの根拠は示されていないが、津軽の繁次郎話は、なるほどそう思わせるものがある。ここで一応の結論づけをしてみたい。

南部の繁次郎話は、前に述べたところの鯨場からの移入過程の話であり、江差の繁次郎話として比較的新しく伝承された話と考えられる。それには鯨場を経由しないまでも、直接津軽から陸、船の交易を通して移入されたものもあろう。それに対して津軽の繁次郎話は、もともとこの地にあった話が、鯨場に流れて江差のとなり、それが還流して伝承されているものであろう。いうなら江差の繁次郎話の核となったのではなからうか。そこでは案外、木こりなどの話としてあったのではないかと推測される。しかしここでは十分にそれを証拠づけることはできない。一応は仮説として提示しておきたい。

(はなべ　ひでお・実践女子学園中学校)